

東京五輪「ノスタルジーの果てに」

写真は東京五輪・パラリンピックを巡る主なトラブルなどの経緯（毎日新聞 2月12日朝刊）。まさに迷走続きの7年半である。

組織委員会の森会長が女性蔑視発言で辞任し、橋本会長が後任に選出された。これで一件落着とはいかない。世界中を揺るがすコロナ危機により、五輪開催の是非が問われているのだ。

毎日新聞 17日夕刊特集ワイド「理の眼」で、ジャーナリストの青木理さんが「ノスタルジーの果てに」と題して、五輪騒動に鋭く迫っている。抜粋して紹介する。

東京五輪の招致に僕は最初から懐疑的で、反対を公言してきました。そもそも過度な一極集中の改善を急ぐべき東京でいまさら五輪を開くこと自体が意味不明。

そうした都市と地方の不均衡にせよ、被災地の復興や少子高齢化などにせよ、腹を据えて対処すべき課題は山積だということに、言い出しっぺとなった当時の都知事らの発想や動機が何だったかといえ、せいぜいが高度経済成長を謳歌していた1964年への薄っぺらなノスタルジー。

なのに当初は政府も都も「復興五輪」やら「コンパクト五輪」などというもったらしい美名を掲げ、いまになってみればすべてはうそ、控えめに評しても招致のための方便。そういえば「アンダーコントロール」などといううそ（または方便）もありました。

コロナ禍で1年延期に追いこまれ、何もかも迷走続きでケチがついてばかり。当初は7千数百億円と見積もった大会経費（これもうそ？）もいまや関連経費を含め3兆円を超えると会計検査院が指摘するほど肥大化し、さらに数千億円の追加経費まで必要だということのだから、もはや「コンパクト」の影も形もない「放蕩五輪」。足元は借金だらけなのに。

その行き着く果てが組織委トップだった元首相の暴言に端を発する大騒動。世界121位のジェンダーギャップにせよ、不透明で閉鎖的な組織文化にせよ、暴言を無理くり擁護して火に油を注ぐ老醜政治にせよ、世界に恥を盛大にまきちらす様子を眼前に僕は思わずつぶやくのです。だからやめておけって言ったのに……。

過去の栄光にしがみついたノスタルジーで招致に狂奔したオッサン連中は自業自得ですが、せめて今回の騒動をこの国の悪弊改善への契機にしなければ、と思いつつ、ノスタルジーの気配が漂うのは大阪万博も似たようなもの。そちらは大丈夫かしら。

ノスタルジーの気配が漂う大阪万博も、東京五輪騒動と似たようなものだ。

(2021年2月21日)

